19年度　次世代イニシアティブ　研究報告書

１　課題・調査地・名前

課題名：「民族医療の文化的側面と技術・資源的側面の相互関係性及び、伝統医療の持続的な活用にかんする研究」

調査地：インド

名前：加瀬澤雅人（京都大学　東南アジア研究所　研究員(グローバルCOE)）

２　研究目的

民族医療をテーマに、伝統的でありながら実践的な技術文化を、現代社会でどのように活用していくのかをアーユルヴェーダ医療を事例に考察した。この医療の担い手たちが、地域に根付いた文化として、あるいは有用な医療技術として、どのように自らの医療のあり方を維持し再構成していくのかを明らかにした。

３　研究の内容と成果

インドにおけるこれまでアーユルヴェーダの治療家たちは、村落の人々への福祉として住民のための医療全般を担うのが一般的であった。しかし今日では西洋医学をはじめ様々な医療が存在し、多様な医療のなかのひとつとして民族医療は位置づけら利用される。近代化・社会変化が進むなかで、治療家たちは従来のようなかたちで治療を維持していくことは難しい。

そのような状況のなか、治療家たちは過去のあり方に固執するのではなく、今日の状況に対応しながら新たに自らの治療を活用しようと模索していることが明らかとなった。調査対象とした治療家の一人 G 氏は今年、都市郊外の村落から、彼の先祖が生まれた辺境の村落へと自らの治療の場を移した。それはできる限り良好な生薬の入手や療養を考えてのことではあるが、このような辺境の地での治療を可能にした背景には、モータリゼーションと携帯電話の普及なくしては実現できなかった。道路網の広がり、バイクや自動車が日常的になったことで、患者はこの地を容易に訪れることが可能となった。また、携帯電話を用いることで、G 氏は辺境の地に居ながら、患者や治療に関する様々な問い合わせに応じることもできる。近年の情報伝達手段や科学技術の発展を用いることによって、治療家たちは自らの治療の形を変化させながらも、できる限りよい治療が提供できるようになったのであり、また、民族医療の持続も可能としている。

４　成果発表の具体的な予定

加瀬澤雅人・田辺明生　2008「民族医療の知的潜在力―持続型生存基盤パラダイムのための一考察」『イスラーム世界研究』1(2)：300-313

G 氏の新たな治療村落

治療家がつくるアーユルヴェーダの多様な薬